

軍属元夫から養育費徴収

県内女性米制度で給与押さえ

本島在住の女性が3月、米国の「養育費回収システム」を利用して、子どもの養育費の支払いに応じない県内在住の米軍属の元夫の給与を差し押さえ、子どもが20歳になるまで、月額数万円の養育費を強制徴収することが18日までに、支援団体への取材で分かった。日米地位協定で給与の差し押さえが認められていない米軍関係者から養育費を強制徴収するのは異例。特に軍の指揮系統に属さない民間人の軍属から回収するのは困難視されていた。識者は「画期的な事例」と評価した。

(25面に関連)

識者「画期的な事例」



同システムは別居中の親の居場所を突き止める、法的な親子関係を確定し、養育費を回収する仕組み。ただ相手方が米本国にいないと利用できない。女性は日本の家庭裁判所が支払いを命じる書面を得た上で、国際家事相談支援「ウーマンズプライト」(北谷町)のスミス美咲代表の協力を得た。

スミス代表によると、米兵の場合、女性側が家庭裁判所の調停や審判で作成した書面などを所属部隊の上司に送付すると、上司からの命令により支払いに応じるケースが多い。だが軍属の場合は、所属する米本国の民間企業の上司に連絡しても全てのケースで黙殺されてきた。

スミス代表は嘉手納基地内にある元夫の私

書箱の住所が米カリフォルニア州となつていふことに目をつけ、同州裁判所に養育費支払いを申し立て、強制徴収の決定を得た。

女性は「裁判をするのは正直つらかったが、子どもの将来のためには後悔はしたくない気持ちでやりきった。最後まで諦めなくて良かった」と話した。

(梅田正寛)

「奇策」地位協定に風穴

私書箱着目、住所調査

軍属から養育費徴収

日本の家庭裁判所の手続きを経た上でも養育費を支払わない米軍関係者から強制徴収する突破口が開いた。日米地位協定という厚い岩盤に風穴を開けたのは、米軍関係者ならば誰でも持つ私書箱に着目をつけたため。熱意と知恵だった。

(1面に関連)

3年かけ権利救済

「ウーマンズプライド」沖縄の女性と米軍関係者のスミス美咲代表は主にこの間で起きる国際家事

相談支援で16年の活動歴がある。2020年、米兵との相談を受け、行方知れずだった父親が米ハワイ州に居ることを突き止め、沖縄から同システムを利用して養育費を強制徴収した経験を持つ。スミス代表はこの経験から、米軍関係者ならば誰でも設けている基地内の私書箱に着目をつけた。

住所を調べたところ、カリフォルニア州であることが判明。元夫が米本国内に住所を有し、この制度が適用できると認定する可能性があるとみて州の裁判所に申請した。この粘り強く、諦めない取り組みが女性の権利救済につながった。女性は家庭裁判所の司法手続きやスミス代表の支援を受け、3年近くの歳月を

経てようやく養育費を受け取った。

女性は「途中で駄目かと思っただけでもあったけど、スミスさんの協力で養育費を得られた。同じ境遇の人は子どもを育てて、最後まで諦めないでほしい」と語った。

(梅田正寛)

軍属から養育費徴収

現状「諦め」に道開く

解説

日米地位協定の厚い「壁」によって、たとえ相手が目

の徴収は日本人よりもハードルが高い。中でも米軍の指揮系統に属さない軍属からの徴収は絶望視されていた。

所の審判を終えていても困難とみられていた米軍属から養育費を徴収した画期的事例だ。米国の養育費回収システムを利用するために、米軍関係者

今回の事例により、米軍関係者の相手方が支払いに応じなくても、強制徴収できる道が開いた。そのためには①家裁の調停や審判で作成された書類を得ている②相手方の基地内の私書箱の特定を満たす必要がある。

ならば誰でも持つ基地内の私書箱に目をつけた「ウーマンズプライド」のスマイス美咲代表の卓見

スマイス代表は「米軍関係者の場合、特別な理由がある場合をのぞき、協議離婚ではなく、できるだけ家裁を通して離婚し、きちんと取り決めることが重要だ。地位協定があるからといって養育費の徴収を諦めないでほしい」と呼び掛けた。

が光る。さらに養育費徴収の当てもない中、最後まで司法手続きを貫徹した女性の諦めない姿勢も奏功した。

米軍関係者に限らず、相手方からの養育費未払いは「子どもの貧困」を生み出す要因となっている。日米地位協定で保護されている上、言語や慣習が違う米軍関係者から

(梅田正寛)